史料紹介

天保九年　御用留

解　題

後藤重巳
榎並賢悟

ここに紹介する日田郡五馬市村の「天保九年　御用留」は、別府大学附属博物館が収蔵する「豊後国日田郡五馬市村文書」中の冊子の一点である。本文書群は旧日田郡五馬市村（現日田郡天瀬町）に関わる村方文書であり、かつて、別府大学が書肆を通じて購求したもので、その内容は近世中期を含む幕末期の経済史料が主体となっている。

いま、その内容を少し詳しく紹介するならば、元禄期以降若干の年代を欠くほぼ累年的な「年貢割付状」、寛保期以降、同様の「皆済目録」をはじめ、寛政期以降の「田畑御免割帳」「宗門改帳」のほか、秣・刈敷場争論史料とそれに関わる絵図、数点の「村明細帳」など比較的まとまった文書史料から構成される。

近世期、日田代官（西国郡代）支配下の日田郡は、最小単位の村を地域ごといくつかの「筋」に編成して行政単位とし、それを総括する庄屋を「筋代」と呼んだ。日田郡内は都合九つの筋からなり、旧五馬荘域は口五馬・奥五馬の二筋に分けられ、それぞれ六ヶ村・七ヶ村を含み、五馬市村は奥五馬筋に属した。

奥五馬筋の筋代を勤めたのは五馬市村庄屋の森家であり、幕末寛政期以降の当主は、宇平治－周平－信作－謙平と代替りする。

今回以降、翻刻を継続予定している史料群は、「御用留」「御用状留」「筋代御用留」「御用談日記」「御用談記」など

と外題され、その記録の目的・動機や内容は若干異なっている。

「御用留」ないし「御用状留」は通常に言われる回状留めであるが、「御用談日記」「御用談記」及び「筋代御用留」は筋代・庄屋などの用談の書留めを含む冊子である。

天保十六年の『御用談日記』によると「正月十一日用談、五馬市信作宅出会、新城彦右衛門触出」とか「五月二日、御用談本城良平方ニて」などの表現が見られ、「御用談記」安政四年分には表紙に「四番」と号数が記され、その内容に「十月三日、惣代申談書」などあり、また天保十三年の「筋代御用留」では「御用談申極之事」と見え、これらが筋代などの寄合日記であることが知られる。この種の寄合日記の内、安政六年分には「四番」の号数が付され、表紙裏に「覚」として「壱番　一御用談記　壱冊　五馬市謙平方へ預置、二番　一同　壱冊　芋作又市方へ預り置、三番　一同　壱冊　塚田俊左衛門方へ預置」と書かれ、寄合日記原本が座元となった村庄屋方に分散保管されていたことが分かる。

安政六年の「四番」に当たるこの帳面は同年十月三日の寄合記事から起筆された四冊目の帳面であり、筋代の五馬市村庄屋に保管されたもので、この度の寄合が当家で行われたものであることが推察される。

さて、以降継続的に紹介する「御用留」のうち、今回は天保九年の「御用留」であり、本文書中の「御用留」としては時代的に最も古い史料になる。

内容は、「戌正月始」と起筆し、まず最初に約十三頁にわたり、日田役所からの「前々被仰出候御法度」十六ヶ条を掲示、この趣旨を小前末端まで周知すべき旨の廻達から始まる。以下、内容の詳細の一々については省略するが、俯瞰的に述べると、その大半は年貢納米銀・貯穀・江戸長崎廻米・郡中入用銀前割などに関る内容である。

なお、この「御用留」の料紙は、その大半を古い「宗門改帳」の裏紙（紙背）を用いている。すなわち、表紙とも六十六葉（内、表紙以外の墨附五十三葉）中、四十三葉が紙背利用であり、いわゆる「留書」などの文書に対する紙利用の実態が察せられる。

この紙背文書は、同村の文化二年の「宗門改帳」であり、前後する時代の宗門改帳の体裁や本紙背文書の余白紙数などから勘案して、ほぼ一年分（一冊）を利用しているものと考えられる。

五馬市村文書中には、寛政期以降の「宗門改帳」がほぼ累年的に遺存しているが、文化期では文化二年分が欠落しており、両者の関係は一致する。

この問題については、改めて検討する予定である。

校訂に際しては、可能な限り原本の体裁に従ったが、組本の都合上意に沿わない部分も少なくない。記事中の解読の難解・不鮮明な文字や用語については「　」で示し、判読したものには（カ）と付した。

本史料の解読に当たり、榎並賢悟君（平成十年度卒業・現在長崎市役所勤務）の労苦に負うところが大きいことを明記する。

（文責・後藤）

（表紙）

天保九
戌正月

御用留

日田郡
五馬市村

（タテ　二五・〇センチ、ヨコ一八・五センチ）

戌正月始

前〻被　仰出ル御法度之趣ヵ并五人組帳ケ条書之通、弥相守ル儀は勿論、婚礼之節水掛ヶ之類其外喧嘩口論ホ不致、忠孝を相勤、農業家業を出精いたし、万事費を省き倹約第一ニ心懸ヶル様可申教ル、

但、田畑作付手入入念、耕作手後ニ不相成様為致、且楮櫨茶苗木植付杉差立ル様、是又小前江急度可申付ル、

一、当戌年定免年季切替有之村々格別増米いたし并小物成其外、年々不定米銀納之分、当戌年稼増減有無共取調、いつれも二月廿日迄ニ無間違ニ書付可差出ル、

但、簗網渡世之類は、五月廿九日迄ニ書付可差出ル、

一、前〻荒地并近年荒地之分共、精〻可起返は勿論之儀、起返後当戌年十三ヶ年目ニ相成ルハハ、本免入并免上等取調、五月十日迄書付無間違可差出ル、

但、畑田成等有之分は、取調是又五月中書付可差出ル、

一、見取場小物成之内、御高入可相成場所并野畑刈畑等ヶ見取場ニ可相成分、其外新規切開切添等之地所有之ルハハ、無油断吟味いたし可申出ル、

一、御林往還並木道添其外地続之場所連々田畑江切込ル故、往来道巾狭く相成、人牛馬共通路差支ル場所有之哉ニ相聞、甚如何之事ニ候、右躰之場所は、古来之道敷取調、切挟ル丈ヶ其地主江申付、道敷元形之通附土いたし、往来差支不相成様可致ル、都て道橋之儀は、春中農業手透之間手入いたし、往来不差支様可致ル、

一、御林近辺野火有之節は、村役人山守其外早速駈着、消留可申ル、御林之儀は、前〻ヶ被仰渡も有之、大切之儀ニ付、聊等閑ニ致間敷ル、

一、当戌年宗門絵踏之儀、二月中旬ヶ出役廻村相政候条、宗門人別帳五人組帳共前〻仕来リ之通リ家内人数男女年附ヶ、牛馬数等入念相改并小前壱人別持高等迄不洩様相記、印形取揃、当月晦日限可差出ル、且絵踏之衆他出病気等ニ而罷出兼ルもの并留守居之者名前書申ル出役先江差出改を可請ル、

但、年〻引続他出断等いたしルも有之分ニ相聞、

如何之事ニハ以来は宗門改以前呼返シ置可申ハ、

一、老年およひハものをハ、宗門人別帳相除ハ族も間〻有之、不孝之筋ニ而甚如何之事ニ付、先支配ニおゐて伺之上、申渡置ハ通、八十歳以上之老人有之、下女下男等も無之ものは家別割合ニ相勤ハ公役、村役之人夫を相除、孝道を為相弁、都て老人を大切ニいたしハ様可申教ハ、

但、八十歳以上之ものは勿論、当年八十歳ニ相成ハもの取調増減書付、宗門帳ニ相添可差出ハ、

一、百姓共之内、相続人無之ものを他所江遣し候而ては百姓株相減ハニ付、右様之もの者他所江差遣間敷ハ、若無拠子細有之ハては、其段願出差図を可請ハ、猥ニ村送寺送等差出間敷ハ、

但、百姓株相続可致もの年若ニ而独身ニハて相応之嫁聟を取遣し、及老年子無之もの江は養子をセ話いたし遣し、都て百姓家名不絶様厚世話可致ハ、孝行奇特之ものは勿論、農業格別出精ハもの有之ハハ其段取調可申出ハ、

一、博奕は不及申、賭之諸勝負堅相慎可申、且村役人共村内繁々見廻り、小前末〻迄右躰之儀無之様厳重ニ取締可致ハ、

一、御免無之者帯刀致間敷ハ、若心得違ニ而帯刀いたしハ欤又は長脇差を帯し百姓ニ不似合風躰之もの見当ハハハ、早々可訴出ハ、

一、堤川除用水路御普請自普請所共破損いたしハハハ、可成丈小破之内取繕、不及大破様可致ハ、

一、高札之儀、年数相立文字相分兼ハ分は墨入之儀可願出ハ、

一、鶴取ハ儀は決而致間敷ハ、

一、貯穀之儀は、年々作徳之内を以出穀いたし、囲置ハ得は、凶作其外ニ而夫食差支可及飢餓程之時節割渡可為凌との事ニ而、全百姓を御労リ御憐愍之厚キ御趣意ニ有之ハ故、百姓共無懈怠出穀いたしハ様申諭ハ得共、兎角余慶之品を相納ハ事之様ニ存ハ族も有之哉ニ相聞、甚以心得違之事ニハ、既ニ去年之如キ凶作ニ而、夫食ニ差支ハ節は、銘〻江割渡ニ相成飢餓をも相凌ハ事は歴然之儀ニ有之ハ間、以来年々作徳籾雑穀之内を以、格別出穀いたし凶年之手当ニ囲

置ハ様可致ハ、

但、小前之内ニは、凶災と申は、稀成事ニ而見越之覚いたしハ而、少も緩ニいたしハ方可宜杯と心得違之ものも可有之哉ニハ得共、何時何様之儀可有之哉とも難斗、其場ニ臨ミ如何様相歎ハ共無詮事ニ而、平日心掛之厚薄ニ寄非常之節安危ニ拘ル事ニ付、此儀能々村役人ゟ可申諭ハ、

一、村入用之儀は、村役人之世話方厚薄ニ寄、軽重も有之儀ニ付、都て費を省キ小前之もの疑惑不致様実意ニ世話可致ハ、右村入用帳は仕来之通、三月朔日限可差出ハ、

右之趣村役人共得其意、小前末ミ迄不洩様可申通ハ、比廻状村下ニ令請印、早ミ順達、留村ゟ可相返もの也、

戌正月六日　　新上村ゟ受取
日田　　小五馬村継立　五馬市村
御役所

御朱印頂戴之寺社之輩、不依寺社領之多少、境内斗之雖為御朱印　於令所持は、御朱印可被下之間、御料私領在ミ寺社領御朱印写を差添、来戌四月ゟ六月迄之内、江戸江致持参本多下総守井上河内守所江相達ハ之様可被触之ハ、以上、

西十一月

右之通、被仰出ハ間、於村々得其意、御朱印頂載之寺社不依多少、境内斗之御朱印地高共、不洩様巨細相糺有無共其寺社致奥印、来ル廿五日迄ニ可書出ハ、此廻状村名下江令請印、早ミ順達、留村ゟ可相返もの也、

戌正月十二日　御役所　　五馬市村
新城村ゟ受取
小五馬村江継立

一、銀八百八拾壱匁弐分弐厘　三納　五馬市村
一、同八百弐拾目四厘　口米
外百弐拾六匁六分九厘　納入用

右者去酉御年貢三納銀之内、二月取立可申并ニ御米代納入用凡積銀壱〆目ニ付、拾五匁宛取立ハ間、納済之上過不足有之ハハ　追ミ可相触条、来月十四日十五日之内、

急度上納可致ハ、若不納之もの於有之ハハ厳敷ニ遂吟味ハ条、其旨相心得可申、此廻状村下庄屋令請印、早ミ順達留村ゟ可相返もの也、　二月二日　新上村ゟ受取

戌正月廿三日　御役所　小五馬村ニ継立

覚

一、其村ミ異国船ヵ抜荷野火一件其外共、添高札之分先支配名前ニ有之分、御巡見前差懸ハ儀ニ付、名前計削、当御支配御名前ニ可致ハ、

一、貯穀有高、馬員数板江認、一村限リ郷蔵前江懸置可申ハ、尤先達而申渡ハ案文之通可相認ハ、

右之通相心得、廻状村名下江受印、早ミ順達留ゟ可相返者也、

戌二月十一日　日田

御役所

右村ミ

庄屋

組頭

惣百姓

一、丁銭拾九貫八百弐拾七文

右者当戌郡中入用前、別書面之通触ハ条、来三月判□二□両□之内、丸屋幸右衛門ゟ願書を以可相納ハ此廻状村下ニ令請印、早ミ順達留リ村ゟ可相返ハ、

巳上、

戌二月　日田御役所　村ミ庄屋

組頭

此度新規吹立被　仰付ハ五両判之儀、十一月朔日より通用可致ハ、小判壱歩判は同月十五日より、追ミ引替可遣ハ、尤有来小判壱歩判之儀も、追ミ及沙汰ハ迄、新金取受請取方渡方両替共ニ無滞通用可致、上納金も可為同前之事、

一、小判壱歩判引替之儀、たとへハ皆小判皆壱歩判ニ而小判七分壱歩判三分之割合を以引替ハ筈ニハ条、十一月十五日ゟ別紙名前之者方江差出引替可申事、

一、武家其外共町人江相対ニ而申付、右名前之者共方江差出、為引替ハ儀も勝手次第ハ事、

一、引替ニ可差出小判壱歩判共、員数相知ハ事ニハ間、

貯置不申、段々引替可申ゟ、若貯置不引替者相知ゟハハ吟味之上急度可申付事、
右之通可被相触ゟ、

十月

本町壱町目　後藤三右衛門役所
駿河町　三井組　為替御用取扱所
本両替町　十人組　為替御用取扱所
本革屋町　三谷三九郎
室町三町目　竹原屋文右衛門
上横町　泉屋勘兵衛
金吹町　播磨屋新右衛門
田所町　井筒屋善次郎
神田旅籠町　石川屋庄次郎
以上

世上通用之ため、此度位最上之銀を以新規壱歩銀吹立被　仰付ゟ間、右壱歩銀四つを以金壱両之積、尤銀銭共両替弐朱銀壱朱銀同様之割合ニ相心得無滞可致通用ゟ、

一、通用銀之儀も此度吹直被　仰出ゟ条、両替ホ是迄之通相心得、無滞可致通用ゟ、尤引替日限ホ之儀追而可及沙汰ゟ、

一、弐朱銀壱朱銀通用之儀、是迄之通相心得、旦、弐朱銀之儀無程通用停止可被　仰出ゟ間、兼而其旨可相心得ゟ、
右之趣国〻江可触知もの也、

十月

古金銀真字弐分判古弐朱銀壱朱金ホ引替所之儀、当酉十月迄被差置ゟ段、去申年相触ゟ処、今以引替残有之ゟ間、引替所之義猶又来戌十月迄之通被差置ゟ条、古金銀其外所持之者ハ来戌十月ヲ限リ急度引替可申ゟ、

一、草字弐分判之義も壱朱金同様、追而通用停止可被仰出ゟ旨、先達而相触ゟ趣も有之ゟ間、所持之ものハ後藤三右衛門役所并江戸京大坂其外在〻ニて、当時引替御用相勤ゟもの共之内へ品〻差置引替可申ゟ、
右之通、遠国末〻迄得与相心得ゟ様、御料は御代官私領は領主地頭ゟ入念可被申付ゟ、

十月

右之通御書付出ハ間、写遣之ハ条、得其意廻状村下令請印、早〻順達留村ゟ可相返もの也、

十二月二日　日田

御役所

右村〻

庄屋

組頭

惣百姓

一、銀八百八拾壱匁　五馬市村

右者去酉御年貢三納銀之内、三月取立之分、書面之割賦通、今月十四日ゟ十五日之内　急度上納可致ハ、若於不納は厳敷遂吟味ハ条、其旨相心得可申、此廻状村下庄屋令請印、刻付を以、早〻順達留村ゟ可相返もの也、

日田

戌三月二日　御役所　右村〻

役人

覚

一、銀八拾六匁三分五厘　五馬市村

右は去ル申長崎御廻米蔵納不足買納代銀并納諸入用共割賦相触ハ間、三月十四日十五日両日之内、丸屋幸右衛門願書を以可相納ハ、此廻状村下令請印、早〻順達留リ村ゟ可相返ハ、以上、

戌三月二日　日田

御役所

右村〻

庄屋

組頭

返納高籾粟　八拾六石弐斗壱升八合　日田郡

天保八酉「ムシ」此節願済ニ而　天保八　五馬市村

一、籾　三石八斗四升五合四勺　酉詰戻

一、粟　八石四斗七升壱合四勺　同断

一、籾　三斗九合四勺五才　御下穀置籾

天保八酉十一月改

其村々此度御巡見ニ付、明細帳壱冊宛差出ハ様、去月十九日相触ハ処、右は三冊宛入用ニ付、来ル十五日迄ニ可差出ハ、

一、村々庄屋并組頭百姓代幾人有之ハ共其名前書相認メ、銘々印形取集、三役人之内壱人、来ル十五日迄ニ可罷出ハ、右之趣得其意、此廻状村名下江令請印、早々順達留村ゟ可相返もの也、

日田

戌三月十日　御役所

此度

御巡見ニ付、村絵図一ヶ村ニ三枚宛差出ハ儀被仰渡ハ間、其御村々控絵図御取集、来ル十三日朝五ツ時、御持参御出勤被成ハ、以上、

会所

三月十一日

桜竹新三郎様

此度御巡見ニ付、其村々明細帳三冊宛御入用ニ付、去ル十五日迄ニ可差出旨相触置ハ得共、今以不差出等閑之至ハ、取調方差支ハ条此書付披見次第、早々三冊宛可差出ハ、

一、村々庄屋并組頭百姓代幾人有之ハ共、其名前相認銘々印形取集、三役人之内壱人、去ル十五日迄可罷出旨相触置ハ処、今以不罷出村々も有之ハ間、早々可罷出ハ、

一、御巡見ニ付、御尋之ヶ条有無書付并右ニ付、被仰渡ハ趣請印帳共、今以不差出村々は早々取調可差出ハ、右之趣、得其意、此廻状村名下江令請印、早々順達留ゟ可相返もの也、

日田

戌三月廿七日　御役所

右村々

庄屋

組頭

百姓代

古文字銀古弐朱銀引替方并引替所ホ之儀、兼て相触置ハ所、未引替残之分も不少、尤右引替方ニ付而は

諸雑費等可相掛訳を以、是迄古文字銀古弐朱銀引替ニ差出ゟ者引替所迄道法相隔ゟ分は、里数ニ応し諸入用被下ゟ所、向後は道法之遠近ニ不拘、古文字銀一貫目ニ付、銀百目宛古弐朱銀は百両ニ付、金拾両と為御手当被下ゟ間、来戌十月を限リ引替可申ゟ、

一、通用銀吹直壱分銀吹立被仰出弐朱銀儀ハ無程通用停止之旨、先達而被仰出ニ付而者通用銀弐朱銀共持之ものハ早ゝ差出引替可申ゟ、尤引替ニ差出ゟ持主江通用銀ハ壱貫目ニ付、銀拾匁宛弐朱銀八百匁ニ付、金壱両ツヽ、是又御手当として被下ゟ間、精出引替可申ゟ、

右之通相心得、古文字銀弐朱銀ハ勿論、当時之通用銀弐朱銀共所持之ものハ聊不貯置、早ゝ引替可申ゟ、若其上ニも貯置ゟもの於有之は厳敷可及沙汰条、其段兼而相心得ゟ様御料は御代官、私領は領主地頭方急度可被申付ゟ、

右之趣、向ゝ江可被相触ゟ、

十二月

此度吹直被仰付ゟ銀之儀、当月十八日より追ゝ引替可遣ゟ、新規吹立被仰付ゟ壱歩銀ハ、同廿一日方通用可致ゟ、尤右限之儀も追而及沙汰ゟ迄者、新銀取交請取方渡し方両替も無滞通用可致ゟ、上納銀も可為同前事、

一、引替銀之儀は、丁銀小玉銀之無差別取交引替可遣ゟ、勿論新規焼銀錆銀并極印相分兼ゟ分とも勝手次第可差出、是又無差支引替可遣ゟ条、来ル十八日方銀座を始、別紙名前之ものとも方へ差出引替可申事、

但、丁銀差出小玉銀ニ引替、又は小玉銀差出丁銀ニ引替ゟ儀も、勝手次第ニゟ事、

一、武家其外共町人相対ニ而申付、右名前之もの方江差出為引替ゟ儀も勝手次第ニゟ事、

一、引替ニ可差出丁銀小玉銀共、員数相知ゟ事ニゟ間、貯置不申段々引替可申ゟ、若貯置不引替もの相知ゟハハ吟味之上急度可申付ゟ事、

右之趣可被相触ゟ、

十二月

銀座

蛤売町　　三井組　為替御用取扱所

駿河町

本両替町　十人組　為替御用取扱所
室町三丁目　竹原屋文右衛門
上横町　泉屋勘兵衛
金吹町　播磨屋新右衛門
神田旅籠町　石川屋庄次郎
以上

右之通、御書付出ル間、写遣ッル条、得其意廻状村下令請印、早〻順達留村ゟ可相返もの也、

日田
戌二月廿三日　御役所

右村〻
庄屋
組頭
百姓代

其村〻当戌年菜種取入高、手作手絞之分共取調、書付可差出ル、旦、銘〻自分遣之分は其旨相認、大坂堺兵庫等江積廻ル分有之ルハハ、右三ヶ所之内、何町何屋誰方江売渡、何国何所船頭誰船ニ而積廻ル旨、申儀都て例年之通巨細取調、来月十五日迄書付可差出ル、此廻状早〻順達留村ゟ可相返者也、

戌四月十八日
日田
御役所　右村〻
庄屋
組頭
百姓代

大原社五穀成就御祈祷相廻ル間、御村〻共御受納被成、早〻御継立可被成ル、

三月廿一日　会所　右村〻
御役頭中

諸国御年貢江戸御廻米之内、以来御廻米高百石ニ付、米三斗五升宛之積、五合増之割合を以、籾七斗宛籾納可被申付ル、

右之通、去酉十一月中被仰渡ル処、同年之儀者時節後れ相成ル ニ付、其段申上、当戌年ゟ相納ル筈ニ付、得

其意、廻状村下令請印、早〻順達留村方可相返もの也

戌閏　四月廿八日

日田

御役所　　右村〻

庄屋

組頭

百姓代

覚

一、銀四百四拾壱匁弐分七厘　五馬市村

右者

御巡見様方御休泊諸入用、旦、御宿取繕普請諸入用前割、書面之通割賦相触ゟ旨、当月廿日廿一日両日之内、丸屋幸右衛門願書を以御納可被成ゟ、此廻状村下御請印被成、早〻順達留村方御返可被成ゟ、以上、

戌五月九日　　会所

右村〻　　御役頭中

当田方之儀出水有之場所は格別、其外ハ一統草木も宜、当時之趣ニ而は無難之年柄相聞、然ル処霖雨之後、俄ニ暑気絶ゟ得は、其所ニより虫附等有之事もゟ由及承、当年之儀も右躰之儀ニ有之間敷ゟ得共、差掛リ防方世話いたしゟ而は、難行届筋も可有之候哉虫防之儀は其土地ニ寄品〻之取計も有之、夜分時ニ而、火を焚或は毒荏を流し又者空鉄砲を打ゟ様成儀も、其国ニ寄致「　」ゟ取計も有之、各〻は別而油断も有之間敷事ニゟ得共、虫附之田方江は鯨之油を凡壱畝ニ弐三滴も打□て候得は、虫を去ルよし鯨之油無之土地は、暁天ニ風上方石灰を婦リ掛ケ、根虫ニゟハハ用水口より石灰を流しゟ得は、去リ候由、尤右石灰ニ而翌年土地〻リゟ様ニも存ゟハハ、各方竹之葉を入置、春ニ至リ、地返しゟ得は、地〻リ無之趣ニ而は右之趣兼而相心得、村方之ものへも虫防之儀も申諭置ゟ様可被致ゟ、右兼而手当心得之儀上ニ而も御世話有之段、越前守殿被仰含ゟ間、各油断無之事ニゟ得共、猶又手法も兼而申含ゟ様可被致ゟ、

七月

右之通、天明八申年申渡、寛政二戌年猶又相達置ゟ得共、年数も相立ゟ儀ニ付、為心得申達ゟ間、不洩様村〻江可

被申渡ゟ、

戌六月十三日

右之通、御書付出ゟ間、写遣ゟ条、得其意小前ゟ不洩様可申聞、此廻状村下令請印刻付を以、早〻順達従留村可相返もの也、

日田

戌七月廿日　御役所　右村〻

庄屋

組頭

百姓代

覚

一、丁銭拾九貫八百六拾八文

右は、当戌郡中入用前割、書面之通相触ゟ間、当月廿九日晦日両日之内、丸屋幸右衛門願書を以、御納可成ゟ此廻状村下令請印、早〻順達留リ村ゟ御返可被成ゟ己上

戌七月廿三日

右村〻　会所

御役頭中

覚

一、銀弐貫五拾目也

右は、当戌御年貢初納銀割賦、書面之通ニゟ条、来月十四日十五日之内、急度上納可致ゟ、若不納村方於有之は、厳敷遂吟味ゟ条、其村相心得可申ゟ、此廻状村下庄屋令請印、早〻順達留村ゟ可相返もの也、

日田

戌九月八日　御役所　右村〻庄屋

組頭

百姓代

追而当戌御廻米手本米、上中下三袋宛、例年之通収納次第可差出ゟ、以上、

一、昨五日ゟ筋代御用相勤ゟ処、御用之趣左ニ

一、米四百七拾八石三斗三升四合

代銀六拾五貫五百九拾九匁六分八厘内

銀四拾八貫六百四拾弐匁弐分六厘

当戌二月取立高

但、米壱石ニ付

銀百壱匁六分九厘壱毛
残銀拾六貫九百五拾七匁四分弐厘　不足
但、米壱石ニ付　　此節御取立辻
銀三拾五匁四分五厘壱毛

一、去ル申年拝借夫食、当戌年賦返納年延之事、
一、当戌長崎御廻米之内、買替米石数取極願書差上ル事、
是は、会所ニ而取調ル処、当年之儀は両筑米引合不申、請負人一向無之、尚又御役所ニ而も御聞済難出来ルニ付、弐歩通願書差上ル積併御上出来ル而も、受負殊之外六つヶ敷趣ニ御座ル、
一、貯穀拝借之内、当戌返納詰戻之分年延願之事、
一、当戌年御廻之内、三分通来亥之新石早廻ニ御願申上ル事、
一、先達而一里内外之所ミ、出火有之何方と申ても油断不相成、此節申渡ニ不及、前ミ申渡も有之、御年貢取入中火元念入可申旨、会所ゟ村ミ江厳敷可申達段被仰渡ル、
一、御米津出日限十一月朔日ゟ附出ル様、先日願書差上置ル処、末タ御下知無之ル得共、昨四日御廻状御仕出ニ相成ル処、当月廿五日津出致シル様御触書拝見いたしル、此段相心得可申様申達度事、
是は、御廻状ニ而御承知可被成ル、
右は、此節御用之趣書中ヲ以申上ル間、御承知可被成ル、此節は御出会不申上ル而は難相済儀ニ御座ル得共、御米御上納御割賦中ニ御座ル間、先書付ニ而申上ル、各思召如何と奉存ル得共、御分リ兼ル儀も可有之ル得共、御承知ニ御座ルハハ、御順達可被成ル、併御存寄御座ルて、何方江（カ）欤御出会御触可被成ル、尤当月朝、御口米不足之分は、御相談申上ル、一口ニ致し是非共借立度奉存ル間、宜御取計之程奉願上ル、以上、
戌十月八日　　本城良平

御役所納　　五馬市村
一、銀九分八厘
但　御廻米壱石ニ付　七九八掛り
銀七厘

会所納

一、同弐百八拾五匁八分五厘　同断

御口米江戸買納

右は、先達而被仰渡ハ去酉御口米江戸買替納代金不足割賦相触ハ間、当十月十四日十五日両日之内丸屋幸右衛門預リ書を以御納可被成ハ、御印形被成刻付を以御廻し、留リ村方御返被成ハ、以上、

去酉御年貢納入用割返

一、同五匁六分六厘　五馬市村

右は、去酉年御年貢銀江懸リハ納入用凡積取立置ハ内、江戸大坂入用之分、引可割返分書面之通ハ条、当戌初納之節、請取之もの印形持参可相届ハ、尤返銀之儀は、小前末〻ニ至迄無高下割返可致ハ、廻状令請印早〻順達留リ村方可相返もの也、

戌十月三日

日田

御役所　右村　三役人印

一、銀五百六拾壱匁六分七厘　五馬市村

右は両御巡見様入用追割丸屋幸右衛門所〻ニ而会所納十四日十五日納

筋代申談ハ覚書

一、御米御取立日限之事、

一、同所々詰庄屋之事、

一、中城詰庄屋賃銀之事、

一、御米俵拵之事、

一、買替米之事、

弐分三分ニ而も申談積

一、御口米并三厘余江戸御廻米受負申談之事、

一、関河岸破渡場繕之事、

一、御巡見様入用追割之事、

俵拵関方仕出左之通

外俵

一、長弐尺四寸　但、小縄拾尋アミ

内俵

一、同弐尺弐寸　但、同九尋アミ
一、さん　八寸
外俵
一かな数　但、七拾弐三ゟ五迄之内
一大縄廿三尋　但、壱寸五六分廻リ
上拵縄七尋
一目貫縄六尋
右は九月廿四日筋寄談之趣

其村〻貯穀割渡ハ分、去酉ゟ来ル卯迄七ヶ年賦可詰戻分之内、当戌詰戻之分并去酉詰戻当戌新穀詰替之分共、新穀取入石数揃次第、早〻届書可差出ハ、

一、御貯麦御拂代御貸附利銀を以、年〻御買上御囲穀有之村方も、前同様相心得新穀取入石数揃次第、早〻届書可差出ハ、

右之趣得其意、此廻状村名下江令請印早〻順達留村ゟ可相返もの也、

戌九月晦日　　日田

御役所印

五馬市村
右村〻
庄屋
組頭
百姓代

一、銀弐貫五拾目　　五馬一村

右は、当戌御年貢ニ納銀割賦書面之通ハ条、来月十四日十五日之内急度上納可致ハ、若不納之もの於有之ハ、厳敷遂吟味ハ条、其旨相心得可申、此廻状村下庄屋令請印、早〻順達留村ゟ可相返もの也、

戌十月十日　日田　　右村〻
御役所　　役人

一、銀弐百三拾八匁七分九厘　　五馬市村

右は、当戌長崎御廻米、四ヶ所納入用銀割賦書面之通相触ハ間、来ル廿四日廿五日両日之内、丸屋幸右衛門預リ書を以、御納可被成ハ、此廻状村名下御印

形被成、早〻御順達留リ村ゟ御返シ可被成ゟ以上、

戌十月　　会所印

右村〻

御役頭中

殿様御儀御不例ニ付、御病気御平愈御祈祷之儀、両町并郡方ゟ於大原宮、明十六日ゟ三昼夜御祈念有之ゟ間、御村〻とも参詣いたしゟ様御取計可被成ゟ、此段申進ゟ、此状早〻御順達可被成ゟ、已上、

戌十月十五日　　会所印

右村〻

御役所中

其村〻、当戌御年貢長崎御廻米之儀、刈取収納之上、来ル十月廿五日ゟ十二月廿日迄日数五十五日限、聊無遅滞津出皆済可致ゟ、旦又、御廻米俵拵雛形壱俵ヅヽ河岸津之湊所蔵所江相渡置ゟ間、右雛形之通拵立、桝目之儀も入念可申、右之趣村役人は勿論、小前末〻迄銘〻及見、外俵小縄拾尋あみ内拵小縄九尋あみ、かな数七拾五位、さん俵八寸、上詰ほとみ縄壱寸八歩廻リニ、縄俵とも精〻入念丈夫ニ仕立可申ゟ、勿論河岸之湊蔵所ニおゐて、俵拵之儀は小口十三かゝり俵形拵立ゟ処、長弐尺四寸、内俵長弐尺弐寸ニ拵上ゲゟ間、其旨相心得、聊等閑之儀無之様精〻入念被拵ゟ様可致ゟ、若等閑ニ相心得ゟもの有之ゟニおゐては、急度可申付ゟ、

一、去酉十月中、酒造人足御触之趣相触置ゟ通近年違作相続ゟ上之儀ニ付、追而被及沙汰ゟ迄は、去〻申七月中相触有之ゟ通、弥酒造三分一造之積可相心得旨、申渡置有之ゟ処、酒造人共之内ニは心得違之族(やから)も有之過造ホいたしゟものも有之哉ニ相聞、甚以不埒之事ニゟ、若三分一造之外、過造等いたしゟもの相聞ゟハハ早速改之者〻差遣、弥無相違ニおゐてハ吟味之上、急度可申付ゟ、旦又、不時見廻リ之ものをも差遣ゟ儀有之間、其旨をも可相心得ゟ故に付、当戌御年貢御廻米津出皆済不相済以前、少し之米ニ而も酒造米等ニ買入ゟ儀は勿論、都而酒造人ニも不限、借貸之引当を以御米取引等いたしゟ儀相聞ゟニおゐ

てハ、双方とも早速召捕、吟味之上急度可申付条、聊心得違無之様可致ゟ、其村限役人共精ゝ心附御廻米不相済以前、右等之儀も聞込ゟハハ、早ゝ可訴出ゟ、若隠置ニおゐては村役人共も急度可為吟味ゟ、右之通相触置ゟ条、村役人は勿論、小前末ゝ酒造人共、銘ゝ堅相心得可申ゟ、此廻状村下ニ庄屋令請印、早ゝ順達留村ゟ持参急度可相返もの也、

戌九月晦日　日田

御役所　印

一、丁銭拾九貫八百六拾八文　五馬市村

右は、来亥郡中入用前割書面之通割賦相触ゟ条、来十一月朔日二日両日之内、丸屋幸右衛門預リ書ヲ以可相納ゟ、此廻状村下令請印早ゝ順達留リ村ゟ可相返ゟ、以上、

日田

戌十月十六日　御役所　印　右村ゝ

庄屋

組頭

組頭代印ニ而新城村江

一、丁銭壱貫七百五拾七文　五馬市村

右は、当戌三ヶ社御初穂例年之通割賦相触ゟ間、来ル十一月朔日二日両日之内、丸屋幸右衛門預リ書ヲ以御納可被成ゟ、此廻状村名下ニ御印形被成、刻付ヲ以御廻し、留リ村ゟ御返し可被成ゟ、已上、

戌十月　会所　印

組頭代印ニ而新城村江継立申ゟ

当戌長崎御廻米津出、先達而御触書之通、弥当月廿五日ゟ津出被仰渡ゟ間、右日限ゟ津出致ゟ様、御村ゝ共小前無洩落様御申触可被成ゟ、

一、御米内札之儀、昨酉年之振合ヲ以御認、初川下ニ差支無之様、御差出可被成ゟ、

但、御出役様御名前未タ相分リ不申ゟ間、御下知次第御名前相触ゟ様可致ゟ、

一、所ゝ出役庄屋未相聞不申、是亦相分リ次第申触ゟ様可致ゟ、

一、米拵之儀は勿論、極ゝ入念俵拵之儀、先達而被仰渡

ハニ付、筋代中江演説之上書渡置、猶亦御役所ヶも御触書相廻リハニ付、御村々共小前一統承知之儀ニ付、弥無間違様拵立津出致ハ様、尚又、御申触可被成ハ、万一小前之内等閑ニ相心得、俵拵方廉末之儀有之ハ得は、於御蔵所刎俵ニ相成、左ハ而は小前難儀ニ可及儀ニ付、精々御申付可被成ハ、

一、御手本俵、会所江御下ニ相成居ハ間、此状着次第、壱ヶ村ヶ壱両人程宛御差出、俵拵方為見届、村方一統江相教江ハ様御申付可被成ハ、

右之趣、御村々共、承知之上此廻状村名下御印形被成、刻付ヲ以御廻し、留リ村ヶ御返し可被成ハ、

戌十月廿日　　辰下別出　　会所

苗代部村始五馬市村留
当廿六日新城村ヶ受取申ハ

当戌御年貢長崎御廻米津出之儀、今廿五日ヶ津出申触置ハ得共、十一月朔日ヶ津出仕ハ様被仰渡ハ間、左様御承知小前不洩様、御申触可被成ハ、此状刻付ヲ以、　早々御順達可被成ハ、以上、

戌十月廿二日　　会所

桜竹村始五馬一村留リ
新城村ヶ受取

御廻米御手本壱袋ニ五合宛入、三袋相納ハ様御触有之ハ処、村々共三合位入相納ハ村方も有之、如何相心得ハ哉是迄相納ハ分は御受取ニ相成居ハ得共、残村々は右御触之通、壱升五合ヲ三袋ニ入、相納ハ様被仰渡ハ間、此状早々御廻し可被ハ、已上、

十月七日　　会所

苗代部村始芋作村留リ順
新城村ヶ受取置

一、買替米三拾石五斗　　五馬市村

右は、当戌長崎御廻米之内、書面之通買替割賦相触ハ間、代米請負人方江早々差入ハ様、御取計可被成、尤増米之儀当十月限、壱石六斗、来十一月中、壱石八斗請負人ヶ申出ハ間、書面之通御承知之上、早々御取計可被成、此

状即刻御順達可被成ハ、以上、

戌十月廿四日　　会所印

右村々　　苗代部始五馬一留リ新城請取
十一月三日朝

御役頭中

当戌長崎御廻米米拵は勿論、入念浜俵拵之儀は、御廻状ヲ以被　仰渡有之、尚又会所ゟも村々江相達し有之ハ処、今日附出ハ村々浜俵拵、御触ニ相振至而廉末ニ有之、難請取分は差返し「」成ニ有之、「分」は受取置ハ得共、此侭ニ請取置ハ而は詰庄屋不念ニ相成ハ儀ニ付、会所江申出、当年不熟之年柄故、御手本俵ニは相劣ハ段、御歎申上ハ得共、前廣被仰渡ハ義、今更申立ハ儀、甚不相済、御手本俵之通、相劣ハ而は、御触之詮無之ニ付、悪分は悉（ことごとく）差返し、御手本通急度相揃ハ様厳敷被　仰渡ハ間、此状着次第、小前江右之段無洩落御申聞可被成ハ、等閑無之様精々御申聞可被成ハ、此上廉末之品は差返しハ間、此段御承知、刻付ヲ以御順達留村ゟ御返し可被成ハ、已上

十一月朔日　申下刻出ス　中城

御蔵所印

桜竹始出口留リ十一月三日朝新城ゟ受取

御米今日津出ニ相成ハ処、縄俵拵之儀極々廉末之段、詰庄屋ゟ即刻御出役様江御伺（ゟ）申上ハ処、村役人不行届之段被　仰渡、勿論御廻状ヲ以御触も有之、尚又、会所ゟも村々江申触置ハ処、縄俵拵御触ニ相振等閑之段厳敷被　仰渡ハ間、明日より附出ハ分、御手本俵江相違有之分、附返しハ様可取計旨、詰庄屋別段被　仰渡ハ間、右ニ付、小前心得違無之様、寸法縄俵拵精々入念相納ハ様、壱人別御申付可被成ハ、此状早々刻付ヲ以御継立可被成ハ、已上、

十一月朔　　会所印

苗代部始五馬一留リ新城ゟ
同四日受取申ハ

寺西蔵太支配所豊後国日田郡何村

一、戌御年亥米、但五斗入　米主　何右衛門印

右之通相改ゟ処、相違無之ゟ、以上　升取　——印

寺西蔵太手附　百姓代　——印

天保九戌年十月　安藤謙次　米見組頭　——印

庄屋　——印

一、米百五拾弐石八斗　五馬市村

外欠米　壱石五斗弐升八合

右は、当戌御年貢長崎御廻米一村限割賦書面之通取立、改として我ホ儀関河岸江出役いたしゟ条、於村ニ得其意、早ニ津出可被致ゟ、旦、俵拵皆済日限ホ之儀は、都而先達而相触ゟ之通相心得、諸事入念取計、尤日割ニ不拘、天気次第出精、皆済可被致ゟ、

此廻状村名下江令請印、留リ村ゟ関河岸御用先江可被相返ゟ、以上、

寺西蔵太手附　苗代郡始高取留リ十一月十六日　新城村ゟ受取十三日朝小五馬村江継立申ゟ

戌十一月二日　安藤謙次印　右村ニ役人中

其御村ニ御米出石無甲斐、右ニ付、関表御出役様ゟ厳重被仰渡、猶又、日ニ出石　御役所江御届相成ゟ儀ニ付、御役所ゟも出石無甲斐、村ニ等閑之段厳重被仰渡ゟ間、御村ニ共小前厳敷御雑(ママ)立、早ニ津出ニ相成ゟ様御申聞可被成、若此上出石無甲斐村方ハ、関表江御召出、急度可被仰渡ゟ間、厳敷被仰渡ゟ間、小前江精ニ御申触、只今天気之内附出、日限不拘皆済ニ相成ゟ様、御取計可被成、

一、御米内札末タ御差出無之村方ハ、早ニ可被成、若差出方延引之村方江は、賃銭先取ニ而飛脚差立ゟ間、左様御承知、早ニ御差出被成、右之趣御承知之上、此廻状刻付ヲ以御廻し、留リ村ゟ御返し可被成ゟ、

已上、

戌十一月十七日　中城

御蔵所印

苗代部始五馬市留リ新城ゟ廿四日受取申ハ

右村〻

御役人中

当戌石代直段

一、大豆壱石ニ付　銀九拾壱匁八分六厘三毛

一、御伝馬米壱石ニ付　銀百弐拾三匁六厘弐毛

一、口米壱石ニ付　銀百三拾九匁九分

〆

覚

利米七斗

代三百弐拾九匁

内九拾目　酉冬五馬市村瞽女江相渡、

残弐百三拾九匁

一、銭百四拾目

是は、申年分利上銭如是、

一、金三分弐朱

是は、五馬市村ゟ村〻へ差出候節相渡しハ積リ申談ハ事、

右は桜竹村盲女取立手続之ため合力と申談ハ事、

戌五月

新城彦右衛門

出口弥惣治

塚田官兵衛

桜竹新三郎殿

覚

酉冬

一利米七斗

代三百拾九匁

内九拾目　酉冬宇土瞽女相渡シ

残而弐百三拾九匁

一、銭百四拾目

是は、申年分利上銭如是

〆三百七拾九匁

内

壱〆七百かへ

三百八拾目弐分五厘　金壱両壱朱受取

差引残て壱匁弐分五厘渡ス

右之通、慥ニ請取申ㄟ、以上、

戌十一月廿一日　桜竹新三郎

五馬市村

伝四郎殿

一、米七石八斗五升弐合　江戸御廻米　五馬一村

此欠弐斗三升六合

〆

外米六升　江戸御廻籾

此欠弐合

但　外ニ御触無御座ㄟ間、此辻三升欠ニ而弐拾目渡

籾納共一日御蔵所出シ

十一月廿四日筋代

当戌長崎御廻米引残、江戸御廻米正米中城関御蔵所

最寄附出、勿論三升欠「　」、是迄之振合ヲ以、石

弐拾目、仮直段ニ而相納可申事差懸リㄟ義ニ付、筋

代ㄆ村〻へ演舌之事、

一、去酉御廻米江戸買納代足銀追割大山筋引〆仮立ニ付、

此節證文差入ㄟ積「　」次兵衛当

次兵衛当

金六拾四両壱分

此利

右は当戌十一月ㄆ来亥方十五日限リ御口米一同

取立之事、

但、證文出来印形いたし置申ㄟ、

一、当戌長崎御廻米買替米代銭取立十一月限リ、八百目

替、十二月廿日迄、八百弐拾目替之段請負人ㄆ申出

ㄟ事、

一、去酉江戸御廻米欠減当戌新石御上納之事

米三石四斗弐升八合八勺

此欠壱斗三合

九拾目かへ

〆三石五斗三升弐合

代三貫四百弐拾六匁
是は、右御口米代足銀一同借立
都合證文高
七拾三両三分
来亥御口米一同取(カ)立

一、江戸御廻米籾下毛郡へ相頼買替納ニ付、足し銀渡方申談之事、
但、此足銀は、追〻御触可有之事、

一、別紙江戸御廻米并籾共都合、目録之通ニ而失張三升欠ニ而弐拾目添中城御蔵所へ御納可然よしニ御座ハ、

一、三納年延、三分一通、当冬上納〆七分ヲ年分返納之願立之積リニ而願書出来ハヘ共、筋代相揃不申ハニ付、印判預ヶ置、会所へ頼置帰村仕ハ、是は、大切成儀ニ付、筋〻方壱人宛御宿へ相詰居ハ様、御咄ニ御座ハ、各様之内方代〻之御出勤御願立可被下ハ、勿論末〻小前へ御沙汰無之様御叶ハ上ニ而御演説可有御座ハ事、

一、昨廿四日より筋代相勤申ハ処、前書之御用向被仰聞ハニ付、書付ヲ以申上ハ間、御承知可被下ハ、御分リ兼ハ義も御座ハハ、御出会可申上ハ、尤各様より何れニ欤御触可被下様御願申上罷出、御演舌可申上ハ、以上、

十一月廿七日　　森良平

覚

一、銀拾壱匁七分八厘　　五馬市村

右は、其村〻拝借罷在ハ助合穀銀差出銀之内、当戌年分取立、辻書面之通ハ条、来ル十二月十五日無相違可相納ハ、廻状村下庄屋令請印早〻順達留リ村方可相返もの也、

日田
戌十月十日　　御役所

筋代御用相勤ハ処、当戌三納御年貢銀当三納ニ三分一御上納御願申上ハ処、御聞済ニ相成ハ間、左様御承知、御割賦可被成ハ、以上、

十二月六日　　新城彦右衛門　印
五馬市信作　殿

出口弥惣治　殿
塚田官兵衛　殿
本城　良平　殿
桜竹新三郎　殿

一、御先触　壱通
右之通継申ハ、以上
戌十二月八日　五馬一村
上井手村

一、銀六貫百六拾六匁九分四厘　五馬市村
右は、其村〻当戌御年貢三納銀、割賦書面之通ハ条、来月十四日十五日両日之内急度上納可致、万一不納之者於有之は、厳敷遂吟味ハ条、其旨相心得、廻状村下令受印、早〻順達留村ゟ可相返もの也、
苗代部村始高取村留り
日田　右村〻
戌十一月廿九日　御役所印　庄屋
組頭
百姓代
十二月七日夜、新城村ゟ請取
同八日朝小五馬村江継申ハ
甲州身延山役僧

（以上）